荒尾市立府本小学校　校長便り　No.38

みんなの居場所

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、諺、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和7年9月29日(月)

保護者様との会話

ある保護者の方とお話しさせて頂き、気分が上がり、大変嬉しく思いましたので、紹介いたします。多少、都合よく編集してあります。ご了承ください。

「校長先生のお手紙は面白かですな～、特に自分を語るが。よ～覚えとんなはるですね。」

「自己や病気のくだりが面白かでしょ？あれはメモ帳ば見ながら書きよっとです。」

「昭和50年頃はほんなこて楽しかったばってんですね～。」

「んなこっです。」

「これからもお手紙、楽しみにしとります。」

こういったお話しを頂きますと最近はモチベーションが上がることはもちろんですが、責任を痛感しています。私の書く拙い文章が、読者の皆様にも読んで頂くことで、影響を与えているのかも!?と思うと、気持ちも引き締まります。

私の母がよく言う言葉、「あん頃（多分、昭和40年から50年代）はほんに良かった。」全くもって同感です。私が育った時代は、高度経済成長期、そして青春時代を過ごしたのがバブル絶頂期、なんか世の中に活気が溢れていたように思います。その時代に戻りたいとは言いませんが、いつまでも気持ちは若くありたいものです。

【雑感】言動に反映される「内面」

私は書道を嗜み、多くの作品を観てまいりました。「人となり」が現れ、作家の考え方、理想、夢、等々が観る者に訴えかけてきます。それらの中に面白いものがありました。「品」と書いてあって、タイトルは「愛」なのです。前衛書道家の作品でした。芸術は人の好き嫌いが強く反映されるので、作品の良し悪しは置いておきます。私はこの作品を、こう解釈しました。

「品の良さは周囲への愛情表現である。」

「愛情のある言動には品がある。」

また、あるお寺で住職がこのような文章を書いて貼ってらっしゃいました。

「食事の仕方、笑い方、返事の仕方で、その人の品性が分かります。」

更に、教育現場で感覚的な学びとして、

「虚勢を張るのは自信（品）の無さの現れ」

であるようです。

心と体（行動）は密接に関係しています。「心の強さ」は荒っぽい言動をしなくても表現することができます。そんな子は、指導を行いますと、すぐに泣くんです。「泣くくらいなら、するな!」ですよ。

言動に丁寧さがあるのと無いのでは、周囲への影響の与え方が全く違います。大人でもそうです。保護者の皆様にもご経験があるのではないですか？そして、大人のその様な言動は必ず子どもに影響します。「言葉遣い」「礼節」「価値観」「道徳」…、子ども達は大人の真似をするのです。

私は最近強く思います。「言動がその人の内面を現す」その人の考え方は、立ち居振る舞いに現れるということです。どんなに建前を語っても、本性は言動に滲み出るということです。私自身、無意識のうちに本性が言動に現れているということを踏まえ、保護者として、人としてどうあるべきか、理想の自分を目指し自分自身を磨く必要があると思っています。

シリーズ「自分を語る」#38

私が受けた椎間板ヘルニアの手術は、現在と比べるとかなり古い術式だったようで、術後4週間もベッド上で生活を送るなど、現在ではそのストレスの大きさから考えても、あり得ない方法だそうです。現在は、傷んだ椎間板は切除するらしいのですが、それを固定するために、チタン製の「添え木」をあてて、ボルトで固定するのだそうです。更に進んだ方法としては、内視鏡を使って、椎間板の「でっぱり」だけを切除したり、「蒸散」させたりする方法があるそうです。医学って、日々進歩しているのですね。私と同じ症状で手術をした場合、今では1週間で歩行ができ、1カ月で退院するのだそうです。私は3か月入院でした。

さて、ベッド上での排泄にも慣れたら、私は、それなりに入院生活を楽しみ始めました。テレビは有料だったので、新聞の1週間分のテレビ欄にマーカーでチェックを入れ、観たいものだけ見て、その他の時間は殆どの時間を読書に費やしました。そして、出来るだけ昼間の時間は眠らないようにし、生活のリズムが崩れないように努力しました。おかげで、当時は300頁ほどの文庫本を1日1冊のペースで読んでいました。どうかすると2冊3冊と増えるので、友達から本を貸してもらうことも多かったですね。入院中に読んだ本はトータルで50冊を超えていたようでした。

そうこうしているうちに、4週間のベッド上の生活も終わりを告げ、次の段階に入っていきます。次は、「躯幹ギプス」による腰椎固定です。こうして文章を書きながら、よく覚えているなぁと感心してしまいます。そう言えばお医者様は「ギプスを巻く」と言ってらっしゃいました。私は全てが初めての体験ですから、「何が始まるんだ!?」と、おっかなびっくりの毎日です。しかし、私を担当してくださる先生方は、私のそんな反応を楽しんでいるように見えました。看護師さんに「何が始まるんですか？」と聞いても、年齢が近いこともあったのでしょうが、「楽しいことが始まるよ。」と言って、ニヤニヤして私の反応を楽しんでいました。「何なんだよ～。」

躯幹ギプスを巻くということは、「立っても良い」ということです。私は多少緊張しながらも、嬉しさを感じていました。ストレッチャーに乗ったまま、病棟から、1階の外来処置室に移動しつつ、「これで、自分でトイレに行けるぞ。」という念願が叶うと思うと、にやけずにはいられませんでした。（自分でトイレに行くことが念願というのも変ですが…）処置室に着くと、ストレッチャーに乗ったまま、タオル状の布を脇から足の付け根部分まで巻かれました。これは、ギプスの土台になる部分であり、直接ギプスの素材が肌に触れるのを防ぐ役目も果たします。その後、私は床と水平に横になることができる、ハンモック状のベッドに移動させられました。これから胴の部分にギプスを巻いていきます。幅の広い包帯みたいな布に石膏が付いていて、それをぬるま湯に浸したものを素早く胴に巻いていきます。一通り胴体を覆うまではすごい速さで巻いていました。そして形を整えるために何度も何度も表面を擦ります。石膏が固まってしまうからです。形を確定した後は少しゆっくり巻き始め、2～3㎝の厚さになるまで巻き続けます。作製にかかった時間は10分程度でしょうか。その後、乾燥させるために、仰向けの状態が2時間ほど続きました。　（つづく）

※　「みんなの居場所」に関するご意見ご感想をお寄せください。（「みんなの居場所」への掲載の　可　・　不可　）